コリア国際学園後援会の集いで、基調講演 鷺田清一氏(元阪大総長、大谷大学文学部教授、臨床哲学者)

鷺田清一さん基調講演 2012年6月9日 13:00~14:00 場所:ニューオータニホテル

教育力とは何か？

教育については、本当にいろいろなお考えをお持ちです。教育になると頭が熱くなる方が多くいるテーマです。そして、いろいろな主張があります。私なりにお話しさせていただきます。

いきなり結論のような話をさせていただきますが、私は「教育とは、教え育てるという他動詞で考えるものではなく、そこにいれば子どもが勝手に育つような場所とか空間を作ること」が教育だと思います。

何かを教えるとか何かを育てるというよりもむしろ、そこにいれば子どもがいれば勝手に育ってしまうような場所、空間を作ることが、教育」だとかねがね考えてきました。

エピソード2つ紹介します。

出版社の40歳半ばの女性の編集者のお話です。

お子さん(幼稚園)が、般若心経をすらすら遊びながら、覚えました。どこに覚えたのか驚いていました。それが癖になりまして、あるお葬式の時に、お坊さんが般若心経を読む時に一生になってご唱和されるんですね。子供さんが、唱和するどころか、丸暗記してますから、お坊さんより高い声で、先んじてお経を読んでいかれるので、お葬式の場なのにいたるところからくすくすと笑い声が生じまして。お母さんは子供を抱きかかえて、表に出て、冷や汗をかいたと話されました。

どうしてお子さんが、般若心経を意味もわからずに丸暗記できたのか？ということなんですが、実は、そのお母さんはメキシコの研究者の方とご結婚されて、ただなかなか就職が上手くいかなくてですね、日本での就職活動をあきらめてメキシコでの就職活動をここ数年なさっていて、それでお母さんは、母子家庭だったんですね。編集者の仕事は時間も不規則ですし、ご自身のお母さんに毎日来てもらって、ご近所でしたから、留守番と子守りを頼っておられたんですね。お母さんの机の上にお経がいくつか置いてあって、実は彼女は仏教に関する本を作ってらっしゃいました。こどもは、蛇腹のような変なものがいくつもあるので、おばあちゃんに「これなあに？」と聞いていたら、おばあちゃんが言葉で教えるんじゃなくて、CDがあったものですから、CDを聞かせてあげたようなんです。

そうすると、そのお子さんがですね。なんか、ものすごく関心持ったらしくて、1人でも毎日毎日聞いていたら、丸暗記してしまったそうなんです。

この話には、オチがありまして、45分CDを丸暗記しているんです。般若心経はそんなに長くありません。なぜ？45分間と申しますと、お経の後に解説が入っているんです。解説ごと45分、お子さんは丸暗記しているんです(笑)ようするに、このお子さんは、お母さんが帰ってきて、おばあちゃんが作ってくれたご飯を食べて、そして遊んでくれるわけではなくて、むしろ、やり残した家にもって帰ってきたおかあさんの仕事に机があるわけですが、お子さんはお母さんが何しているのか全くわからなくて、お母さんが夢中になっているもの見つけて、なんかお母さんがいない時に繰り返し繰り返し聞いていたというお話なんですね。これが、一つです。

この、意味はあとで考えたいのですが。

もう一つは、

山崎正和さん(劇作家／評論家)から直接聞いた話なんです、

満州で、小学校の高学年の時に、受けた授業の話なんです、敗戦が決まって(日本軍が)引き上げていく過程で、山崎先生の話によるとなぜか、学校の先生が一番に引き上げたそうなんです。学校なんかも全部接收(国などの権力機関が、個人の所有物を強制的に取り上げること。)されまして、授業ができなくなった時に、残った大人達です、授業は続けなければいけないということで、ある倉庫で、(自殺された方のご遺体がつる下がっているような場所で)秘密の倉庫で、当時教員免許も何にも持っていない商社の人とか企業の人とかお役人の人とか、大人達がみんなで相談してですね、「お前はなにができる？私はなんにもできないので音楽をする」とかですね、みんな相談して、こどもたちの為に授業を続けたそうなんです。山崎先生が当時小学校5・6年の時にだったときに、受けられて授業はどのようなものであったのかと言いますと、国語の授業はただひたすらマルティン・ルター伝記を読むという、解説も何にもないというただ伝記を読むというだけの授業。それから、外国語と称して教わったのは、当時の現代の中国史。だから、漢文のように読み下すのではなくて、中国の当時の詩をその発音のままです。山崎先生は特に中国語を勉強されているわけではないですけど、今でも中国の詩とか文章を音でお読みになります。それとか、音楽を担当した(私は何も教えられないと言っていた)人は、非常に貴重な蓄音機をもってきて、「ラベルの水の戯れ」「新世界」ですか、その先生が本当に自分が大好きな曲をひたすら蓄音機で聞かせた。そういう授業をお受けになって、そして自分が生涯受けた教育の中で最高のものだった。と山崎先生が述懐(じゅっかい:過去の思い出を述べること)されていました。

私にとって何か？教育とは何か？教育にとって本当に大切なものが何かうかがえるように思います。

最初のお経を唱えるお子さんの話の場合に...、教育っていうのは、子供に何かこれを覚えなさいとか、これを知っておかなければならないとか、何か直接教えるというよりもですね、子供にはきっちり自分の背中あるいは横から見た姿を、きちっと見せるというのが、大切なんだ。そして時間がなくても背中を見せ続けるという事が大事で、その時に、親自身がですね、大人自身が、子供とは関係なしに自分自信が何かにくっつく感じているとか、あるいはどうしても何かをしななければいけないと思いつめていたりとかですね、それが大事で！そうやって真剣に生きていくことが大事で...。その時に子供は、自分のことをかばってくれなくても、横から後ろからあるいは視線の端っこで、しっかりと大人の姿を見ている。だから、人間というのは何か言葉で教えるというよりも、その生きている時のその顔つきとか背中とか、姿とか、そういうものでもう既に子供になにかをしっかりと伝えているんだということですね。考えてみれば怖いことですが、そういう教育をこのお母さんは、背中でしていたのではないだろうか...と思いました。これはこの方に限らず、昔の大人とはある意味でいつもそうしてきたので、その子供を祭りとか町内の役とかそんな本業以外の仕事であっても、いずれこどもにやってもらわなアカンことなんだから、その姿をいつもあえて見えるようにしていた。その祭りで、お互い同士が遊んでいる、遊びほうけているその姿まで含めてきっちりこどもに見せておくというそういう文化というのが、昔の地域社会にはあったのだけれども、そういうものが今の地域社会には本当に少なくなっているということを逆に、この編集者のお母さんの例は教えてくれているのではないかと思います。

それから、山崎正和さんの例から私が教わったことは、

教育っていうのは、ある世代が後なる世代(後世)に、何かを教えるというよりも何かを伝える。ということ、言葉で考えるという方がいいんじゃないかと思っています。つまり、大人がですね、痛い思いをして経験したこと、思い知ったことを、こども達、次の世代にですね、いろんなことチャランポランでも良いけど、これだけは！絶対に！はずしたらいかんぞ！とか、これだけは手放してはいけないぞとか、本当に大切なというものを大人が子供に次の世代にちゃんと「おくる」ということ、「伝える」ということ、そのことの大切さという山崎さんは教えてくれているのではないかと、

つまり、あの学校は教科としたら偏りのある変な授業ですよ。国語でルターを読むだけ、あるいは中国語の詩を読むだけ、あるいは先生の大好きな曲をこれがないと自分は人間でなくなるというぐらいにこのめり込んでいるその音楽、つまりそれぞれの先生がこれだけは子供に伝えておきたい、これを伝えておかないとこども達は幸薄きものにきつになってしまうと、それぞれが確信となっていることを、これだけは！というものをしっかりと伝えようとしたその姿勢を子供は当時の小学生は見ていたんだろういうふうに思うんですね。そう意味では、昔大阪には適塾という学校が北浜にございました。緒方洪庵が開いた医学の塾で、10年間に3千人ぐらい全国から若い武士の子弟とか脱藩した人とか医学の勉強に来ていたのですが、この学校、塾は私塾ですけども、卒業生でお医者さんになった人は半分もないんです。皆さんご存知のように、例えば一番有名なのは、福沢諭吉とか、大村益次郎とか、あるいは赤十字を作った人とか、要するに明治の日本のリーダー達をいっぱい生み出したんです。この適塾で教えたことというのは、たった二科目なんですね。医学とオランダ語です。当時の先端科学を勉強する為に、オランダ語が一番早かった。二科目しか教えていないんですね。なのに、そこから半分以上の人が言論人になったり、殖産興業に関わったり、軍隊制度つくったり、赤十字をつくったりという日本で初めての事業を起こしたリーダー達なんですね。だから、それは知識を満遍なく教えるというよりも、もっともっと教育というよりも、教育力をもったものがあるんじゃないだろうか！？というものが山崎さんの話から、私がいつも思うことです。

「これだけは伝えておかないといけない！」ということ、これを私は、教養という言葉をよく言われますけれども、教養とは何が大事かを知ること、簡単に言えばそういうことではないかと思うんです。もう少し詳しく言うと、教養というのは、何か世の中の様々な出来事に向き合った時にざっくりと4つのカテゴリーにその出来事を仕分けすることができるということ。どういうことかという、

一つは、絶対見失ってはいけないもの、手放してはいけないもの

二番目に、あったら良いけどなくてもいいもの(あればいいが、なくてもいいもの)

三番目に、端的になくていいもの

四番目に、絶対あってはならないもの

ざっくりでいいから、何かの物事と向き合った時に、即座にこれはこういう問題だということを仕分けられるということが、本当の意味で教養というものを身につけていることじゃないかと思われま。

これからの時代というのは、嫌でも暮らしのサイズを縮小していかなくてはならない、ダウンサイジング

(Downsizing)していかないといけない時代に既に入っていますけどその時に大事なものは、この仕分けなんですよ。

これは端的になくていい、余裕があればあったらいいけど、どうしてもという時にはあきらめていい、でもこれだけは絶対に手放してはいけない。そういう仕分けができることなんです。

被災地では、我々がダウンサイジングするどころか、もっともときつい仕分けを強いられておられます。これは友人の映画監督の河瀬直美さん「沙羅双樹」という映画の中で、主人公の人に語らせている仕分けの仕方なんですけど、記憶という事に関して、

記憶というのは、いつも3つに仕分けなくては行けないと彼女は言います。

- ①忘れてええこと
- ②忘れたらあかんこと
- ③忘れなあかんこと

災害の時には、どうしても消せない、消しようもないという、そういう重い記憶(思い出)というものを抱え込んでしまうのですが、それにも関わらず前向いて生きる時に、我々はそういう思い出の中で、それは忘れてかまへん、これは絶対忘れたらいかん、忘れなあかんこともあるということをしみじみと主人公が言うんですけど、これも一つの仕分けだと思えます。

だから仕分けとは、物事の軽重(些細なことと重大なこと)の判断がつくということであって、大人になるというのはそういうことなんじゃないだろうか。そのことを身をもって山崎先生が受けた授業の先生達は、これは大事だぞ！これだけは聞かずに死んではだめだぞ！あるいは、この言葉のリズムと音色、中国の詩の(中国の人と敵対するにしろ、仲間になるにしろ)そういうこと関係なくて敵であれ味方であれ、この言葉の歌のリズムと音色に触れないで、本当の文学あるいは文化をわからないぞ！と。

何かそれぞれが、確かにバイアス(偏見)がかかっているんですけど、でも自分が何十年生きてきた中でこれだけとは思った、手放してはいけないこと、見失ってはいけないことをものすごい純度が高く直接ぶつけるように、体験させて下さったこれは山崎さんが本当に自分が受けた最高の教育であったとおっしゃって下さっていることだと思います。

さて、何が大事か？

私はこれを「価値の遠近法」とよんでいます。

「大事なものから少しずつなくていいものへ、あつてはいけないものへ、価値の重さの遠近法」と言っているんですけど、これはただしそれぞれがそれぞれの人生を歩む中で、あるいは人をしっかりと見てきた中で、そういう判断力をもったものですね。その判断力、つまり教養というものは、人によって人生が違う分、簡単に一致しません。私の場合、若い人なんかと話しているとですね、しょうもない例ですけど...携帯ストラップああいうのは私は携帯というのをほとんど使わないものですから、私の仕分けでいったら、端的になくてもいいものなんです。高校生の人たちにしたら、あつたらいいけどなくてもいいものではなくて、絶対手放せないものかもしれません。だから世代によって個人によって本当に何が絶対手放してはいけないものなのか、何が端的になくてもいいものなのかそういう判断というのはもちろん人によって異なるものなんですけど...だからこそ、例えば自分はこう思う。絶対にこう思うというものをぶつけあう。そして自分と全然違う仕分けの仕方をしている大人のあるいは仲間の意見を考えを聞く中で、もっと正確な価値の遠近法をもてるように「自分の遠近法」を少しずつ修正していくというそういう場こそ教室という場ではないだろうか？そういう風に思うんですね。そういう意味では、山崎さんが受けられた(教員免許をもっていない周りの大人達は)これだけは自分は見失ってはいけない、はずしてはいけないというものをストレートに子供に伝えたと言えると思います。

そういう意味では、今ではあまりにも当たり前になっていますが、教室ではほとんど伝えるというのが起こっていないのではないかと考えているのです。その一番の例は、教室では、先生方は「フランス革命何年や！」とか、「これの活用をいってみろ！」とか言うふうに、生徒に先生は質問しますよね。それが、学生の学力を身に付いている、学力をチェックする、そういう質問法なんですけど。これを人の姿としてよくよく考えた時に、ものすごい倒錯(さかさになること)したこと行っているんです。つまり、「人にものを尋ねる」というのは、知らない人が知っている人に、あるいは知っているであろう人に、これどうしても知りたいんだけど教えてくれませんか、「フランス革命何年ですか？」と聞くことが質問という事なんです。どこの社会でもそうなんです。しかし学校というところだけ、逆の質問をするんです。知っている人が、知らない人に質問するというへんてこなことをやっている。

要するにこれは、質問という形をとった「試し」、人を試しているんです。つまり、あいつちゃんと覚えたのか覚えていないのか人を試す言語(質問)なんです。そうすると、答える方も試されているんだから、答えて「よし！正解！」と言われた、「やった！あつた！」あたり、はずれ、という感覚で受けとる。教室で先生がなさる質問というのは、言葉はきついですけど、ある意味で「不信」、相手を信じないで、「あいつわかっるとかいな」という感じで、ある意味「不信」を前提にして向けられる言葉なんです。

だから、こどもも「あつた！はずれた」という感覚で受けとる。でも、本来の質問というのは知らない人が、「知りたくて頼む教えて」という、それに対しては答える方も「これだけは絶対忘れるなよ！覚えとけよ！」というふうに応える、伝えるという形で応えるということ。だから、「試し」に対しては当たるはずれるだけれども、本当の意味の尋ねるには、「教えて！」という懇願することに「伝える」という形で応えるという事が起こる。

先程の編集者の方、そして山崎さんの話を聞いていたら、最近今の教育現場というのが、みんなも当たり前になっているんですが、何かとんでもない倒錯的な言葉のやり取りになっているのではないかと思います。

もう一つ、世の中にはあまりにも当たり前過ぎて、誰もおかしいとは思わなくなってきたんですけど、

私は試験というものが、人と人之間をこれだけ当たり前になってしまったのかと、ものすごく怖く思っています。

試験というのは、要するに、入社試験、入学試験であってもですね、特に不合格とは何かという言うと、あなたは私達の組織、学校、集団にはあなたの存在は要りませんという、要するに「人を選別する」ということですね。それを生涯に一度くらいのは意味があると思うんですけど、そういう経験というのが、ずーっとより若い子により若い子に、今は幼稚園に入る為の塾の学力テストとか、こどもは受けさせられているわけですね...そうすると物事がついた時から、今の子供というのは「選別」というものにさらされてきた。あなたは仲間です。受け入れます。あなたは私達には必要ない。という、私にはものすごく怖く思えるんです。物事をつくるとほぼ同時に選ばれたり、選ばれなかったりする経験というものをするという...

このことが、こども達に知らない間に、どのような不信感を、あるいは自信のなさを、あるいは自分がここにいることの意味が自分でわからないというようなそんな思いを溜め込ませてきているのではないかということ。

試験のことも、僕はあまりにも当たり前だから、誰も不思議に思わないけれども、逆に本当は見えないところで人の心に溜め込んでいる傷に大きさをちゃんと考える必要があると思います。(子供だけでなく、私は何か大学の教員になった時に、私はなんかこれで二度と試験を受けなくてすんだと思っていたら、教授になる時にまた選考とかあってですね、その後教授になったら終わりかと思ったら文部科学省になんか応募して予算をつけてもらう、偉い先生の前で面接試験を受けたりして、総長になった時はもう試験はないと思っていたら、文科省が大学の予算を減らしてきてまして、その代わりに競争でとりに来いと、学長になってもまだその面接を受けないとやらんという、こ

れまた死ぬ時にまた面接があるんじゃないかと(笑)ちょっと怖くなるくらい。芯でよろしいと審査があるくらい、ぞっとしますけど。

人によって、何が大事で、何が絶対ないと駄目で、何があったらいいけどなくていい、何が端的になくてよくて、何があってはいけないというこの仕分けの仕方が人によって違うだけでなく、社会とか、人生難しくって、司馬遷の言葉の中に、「禍福は糾える(あざなえる)縄のごとし」

禍福とは、禍い(わざわい)と幸福ですね。幸福と見えていたものが縄の中に入り込んでいて実は不幸に反転したり、こんなに悲惨なことはないと思っていものが幸福に反転したりとか、人生とはそういうものだ、社会とはそういうものだというのを、司馬遷はかいていましたけど、そういう風に、同じように良い悪いというものも社会の中ではしばしば反転してしまう。良かれと思っていたことが逆にわざわいを呼ぶ事になったりということで、一筋縄ではいかないところですよ。

そして、本当に大事なことって言いましたけれども簡単に。でも、本当に大事なことを手放してはいけない、見失ってはいけないというのは、実は確信をもって理由を言えないものが結構多いんです。この社会の問題、人生の問題というのは本当に大事なものの程、答えが見えないものが多いですよ。数学とかそんなだったらすぐ間違えようのない正解というのが見つけれられますけど、例えば、国をどのように運営していくか、外交、内政、正解というのがない。一昔前でしたら、構造改革と不況対策となった時に、これどちらもそれ自体は良いことだけれども、それは正反対のベクトル向いてますから、一緒にやるわけにはいかない。そうすると、構造改革やってから不況対策やるのか、不況対策やってから構造改革やるのかによってそれぞれの施策の意味が全然変わってしまう。けれども、どちらを先にやるのかという正解は、誰にもわからない。それは、それまでの政治的な経験、これまでの判断力で自分はこう確信しているというだけで、答えは本当のところわからない。政治というのはあんなに大事なものだけれども、不確定な要素だらけで、その中で不確定なままにより良い判断、選択をしていかなければならないという、ものすごい難しい仕事です。

あるいは、介護とか看護、身近な人の病気の人、あるいは年老いた人の世話をするにしても、まあたいていは家族、お医者さん、医療スタッフ、事務スタッフ、そんな人たちの意見がすっくと一致することなんて滅多にありません。医者は医師としての判断に固執しますし、経営者の方はベッドの回転するを第一に考えますし、それから意外と近そうに見える本人と家族、これ意外と正反対の考え方をする場合が多いですよ。そういうケアの場なんかでも、「全員がそうだ！」と言ってくれるような(納得するような)正解というものがそう簡単に出てくるわけではない。ましてや、自分の人生について、例えば自分がこの仕事をするにどんな意味があるのかとか、あるいは自分が病気の時にスパゲティのように体に管を入れられて、モルヒネを飲んで、そんなことをしてまで本当に生きることに意味があるのだろうかとか...本当に生きるという事は死ぬことより本当に良いと言えるのだろうかとか...自分って一体なんなんだろうとか、こういう生き方の根幹に関わる問題になってきたらそれこそ答えが出てこない、正解が見えない。

だから、我々がそれこそ教育現場で、本当に力をつけていく知的な力、生きる力をつけていくという時に一番ポイントになるのは、正解を探すという事ではなくて、正解なんて本当に大事なところ！出てこないものですから、そうじゃなくて一つは「ん～ようわからんのやけど、わからないけれども、これは大事という直感が働くようになること」「わからんのやけれども、これは大事なところやと直感が働くようになること」

それから、もう一つは、わからないものに(先程の政治の話がその典型です。あるいはケアの方針をめぐる判断がその典型ですけれども)わからないものに、わからないままに正確に対処できる力。何かスカッとさえないですけど。わからない、答えがないものに答えがないままちゃんと向き合える。そして対処できる力というのが本当の(大人として)我々が身につけなければならないことだったのではだろうかと思えます。

その為には、「ああでもない、こうでもない」と、答えがすぐに出なくても、「ああでもない、こうでもない」と考え続ける、考え続けられる力が、とても大事になってくるんです。

すぐに答えを出すじゃなくて、あるいはわかりやすい答えに飛びつくじゃなくて、あるいはみんなが言っていることに付和雷同するじゃなくて、自分の目で見て「ああでもない、こうでもない」本当に納得のいくところまで、考え続けるという事が私は大事だと思います。「考える」ということをものすごく大事にしてきた伝統をもつフランスでは、私が直接聞いたのは1980年代ですから、今どおなっているのかわかりませんが、1980年代に生命倫理法がつくられた時に、生命のコアに関わるような手術を受ける前には、それを受ける決断をする前に、最低一ヶ月間猶予期間をおかないと駄目だという法律だったんです。つまり、不妊手術の特殊なものとか、臓器移植とか、卵子提供とか、そういう生命の中核に関わるような医療の措置を行う時には、その受ける人はすぐに受けると言ってもしてもらえない最低一ヶ月あげないといけな。その間に自分でも「ああでもない、こうでもない」考え、他の人にセカンドオピニオン、サードオピニオンを聞き、あるいは経験者の話を聞き、いろんな人の話を聞くあるいは一緒に考えてもらう、自分自身で考えるそういう「ああでもない、こうでもない」期間を最低一ヶ月おきなさい。そんなことを、国が奨励している、法律で決めているという面白い文化だなあ、すごい筋の通った文化だなあと私は思いました。

それは、医者にも、もちろん政治家にも、答えがないからなんです。それほど大事な問題だから、私達はこうしなさいとは言えない。それより自分が納得できるまで最低でも一ヶ月は「ああでもない。こうでもない」と思い悩みなさい、考えなさいという事なんですね。今の私達の社会からなんか抜き落ちてしまっているのは、まさにそういうの能力なのではないでしょうか。

私なんかは、民放のニュース番組なんか呼ばれた事がないんですね。自分で番組をつくらせてもらう時には、制作段階から一緒にやらせてもらうのですが、ニュースショーにはお呼びがかかったことはありません。普段の私の話、今日の話がそうですが、「ああでもない、こうでもない」ぐずぐず言っていますから、テレビでは15秒ぐらいで自分の経験をズバツと言わないとチャンネル変えられてしまいますし、あるいはニュースキャスターの人がイライラした顔しますからね。

今は、本当に、即座に白黒はつきり決めるような判断ばかり、みんな求めるし、自分でもするようになっている。

問題はこういうことなんです。

こどものそういう「ああでもない、こうでもない」と考えられるタフな知性というのを、本当の意味でタフな知性というのを育てる為にはですね、私はこういう例えを使います。

「潜水、肺活量の多い知性」とよく言います。

要するに、もぐってとつても遠いところにある答えを、そこまでわからないままずっと潜り続けている、どれだけ長く潜り続けられるか、そういうしっかりした肺活量をもっているそういう知性を育てないといけなというの、「ああでもない、こうでもない」と考えるという意味なんです。

その意味では、かつては家の中で意見の対立に触れたわけです。例えば、大家族ですから、両親だけではなくおじいちゃん、おばあちゃん、おじさん、おばさん、奉公人の人もいたかもしれない。

例えば子供が悪い成績をとってきても、

例えばお父さんがババッと怒っても、

お母さんが「でもまあまあ一生懸命やったんやし許したりや」いいはるし、

おじいちゃんは、そのとき息子(孫を怒る息子:お父さん)に向かって「お前そんな偉そうな事いえるなあ。お前の学校の成績でどれだけ学校の先生に嫌み言われて困ったか」ということで、お父さんの意見をまた相対化する。

おじいさんなんかは、責任がない分、気楽に「もうええやん、泣いてるし、勤弁してやれよ」と言う、

大人達が、ポジションが違う事で、意見の対立がいつでもあったんです。

子供の知性ってそういうところから生まれるんです。上等な知性とかそういうのではなく、「今誰の意見についていたらここうまくスルーできるのか!？」ずる賢い知性ですけども、今、おっちゃんの意見に従っておいた方が最小被害ですみそうだなあとか、おかあちゃんについていた方がええとか、そうやって考量(考える量)する。はかりにかけて考える。これなんです!

いろんな違う考えの中で、「これでもないし、あれでもない」と経験をさせる事が大事なんです。

その為には、大人がいろんな考え方をもちょうんと示してあげる事が、私は大事だと思うんです。

ところが、今は子供にとって、核家族ならお父さんとお母さんがいつも共同関係にありますよね。組んで子供に叱りつけるし、その時に先生も味方につける。「先生もこう言うてはったよ」と先生も親と同じ側にいって…。大人が意見の対立をするのではなく、大人が結託(けったく:ぐるになること)して子供に向かうというふうになっているんですね。そうするとどれがいいかと、考えるやなしに、もう従うか、反発して、家を出て行くか、その「all or nothing」しかない。つまり、白黒しか反応しようがなくなるわけです。そういう意味で、私はこどもの本当に肺活量のあるわからないという事態に耐えて、そしてわからないからということで問題を捨てないで、より良い解答を求める必死で考え続けるというそういう知性のタフさを、こどもが自分で養っていく為には、大人がいろんな考えの対立、多様性というものを子供にメニューとして見せてやる。俺はこう考える。俺はこういう風に生きてきた。というその大人が生き方の多様性というのを見えるようにしてあげる。ということが大事なんじゃないかと…

あるいは、評価も一つの軸で、偏差値なんかかの一つの軸で並べるのではなくて、こういう軸でも評価できるし、人はこういう軸でも評価できるぞという、複数の評価軸をちゃんと見せてあげるという事が、私は非常に大事な事なんでしょうかと思っています。

そういう意味では、我々自身もそうですが、次の世代に本当の意味で身に付けてもらいたい力、あるいは知性というのは、ものすごい逆説的な言い方ですが、「勉強する」というのは、わからないという、まだ答えが見えないという事態に、耐えられるような知性の体力を持つ為である。勉強するとは、わからないものをわかるようになる為に、やるんじゃなくて、わからないものがスッと習ってわかるような問題は大した問題ではない。本当の問題というのは、問いと共にどんどんどんどん難しくなって深まっていくものなんです。

だから、勉強するという事、学ぶという事のは、わからないけど、これは大事という問題にわからないままそれと向き合い、問い続けるその体力を、そういう知的体力を持つ為にこそ、勉強することなんだと私は思っています。

* 驚田さんは、断定しようとするフレーズの時に大変遅いスピードで話される。ご本人も「ああでもないこうでもない」と今でもされているのでしょう。公園の中でも、断定はしているようで、「…そうなんだとおもい…ま…す」と表現されます。

最後に、どうしてそういう力を身につけなければいけないのか。というその理由なんですけど、

あの... (長い沈黙)... 私達の時代、あの... 特に明治維新以降、日本が近代社会というものをめがけて邁進してきた中ですね。本来、我々住民は、町民は、市民としてこの社会をみんなで相談し意見を戦わせながらみんなで作っていく、そういう民主主義社会を構成する成熟した市民になるべく、世の中すすできたはずなんです。しかし、皮肉な事に、私達は、この百数十年間にですね、残念ながら市民としてどんどんどんどん未熟になってきたのではないだろうか... という思いが私に強くあります。

つまり、我々は本当の市民になるんじゃなくて、いろんな行政サービスの、教育サービスの法曹サービスのあるいは、流通サービスのいろんな様々なサービスのクライアント(顧客:consumer:消費者)(*我々は市民として成熟するよりも)どんどんどんどん、ただのサービスを消費する顧客になってきたのではないだろうか。だから、税金払っている、サービス料を払っているから、先生のサービスが劣化したとか、あるいは政治家の判断振る舞いが劣化しているとか、郵便が遅配になったとか...、みんなクレマーになるわけです。自分は税金を払っているあるいはサービス料払っているから、サービスが下がってきたら、「お前らのせいだ」というふうに、みんなクレームをつけるだけなんです。

で、その時に、市民なら、(クレマーはクレームをつけるだけなんですけど、顧客もクレームを付けるだけなんですけど)サービスが劣化したときそんなことしません。そうじゃなくて、対案を提示するか、「あんたらのやり方そんなやり方をしているから駄目なんだ。例えばこういうやり方もあるやろ！」というふうに対案を提示したり、あるいはもっと怒り激しかったら「もうあなた方にはこんなこと任せません。頼りにならない。私達自分達でなんとかします。」というふうに、問題をひきとるといことができるような市民になってはじめて、市民として成熟できる。つまり、普段はサービス業の人に任せる、政治家に任せる、企業に任せる、そしてそのサービス料を払ってその恩恵を被る(他人から行為や、恩恵を受ける)という形をとっているけれども、いざとなったらいつでも、取り戻すあるいは対案をこうやるべきではないか、「対案を提案できる」それほど普段からきちっと社会全体の事を、「ああでもない、こうでもない」というふうに考えている。思いを寄せている、そういうことができ初めて私は本当の市民ではないだろうかと思うからです。

今度の震災に限らず、大きな災害にあった時に、いつも我々が市民としてどんなに市民としてこの百数十年間、いろんな能力を失ってきたかを思い知らされます。例えば、阪神淡路大震災の時に、私の西宮の友人は、目の前に川が流れているのに、雨もいっぱい降っているのに、ヘリコプターで運ばれてくるペットボトルを待つだけでした。つまり、雨水どうしたら飲めるような水にかえられるか、小学校の時に習ったような気がしますが、もう全然覚えていない。荒いものを下に？砂を下にするんだっただけ！？全然覚えていない。

それとか、家を修理するのも全部任せる、それから子供が怪我した時に応急措置すらできない。多くの親ができて、とにかくすぐタクシー呼ぼうとすることしかしない。昔だったら、本当に民間医療かもしれませんがけれども、病院に行くというのはものすごい特殊な事で、普段は腹下して腹痛くても、煎じ薬を飲んだり、いろんな応急手当ができたものですが、何かそういうこともできなくなっている。近所のもめ事も、顔役みたいな人がいて、問題もありましたけど、でも自分達で何度も相談してまあまあとおさめたものなんですけど、今はすぐに区役所に訴えたり、弁護士たてたりする...

要するに、なんかこう、命の一番基本的なこと、食べる事も、スーパーに任せてしまう。外食産業に任せてしまう...

排泄物の処理、病気の看護、介護、もめ事解決、なんかそういう本当に命にとって大事なものをほとんど知らない間に、プロに任せてしまっている。そういう「お任せの仕組み」というのが、「質の高いお任せの構造」になってきて、もちろん長生きできるようになってきて、事故も少なくなったし、いいことも多いのですが、良い事が増えたという事はその分私達がそれを自分でやる、あるいは自分で判断するという力をその分失ってきたということで、それが災害の時には一挙に露出してしまうということですね。

だから、我々はもう一度、市民として本当の意味での成熟へと向かう為に、一番必要なものとして、「ああでもない、こうでもない」というふうに、答えがすぐにでなくても問題をしっかり見て、考え続けるという、そういう「肺活量のたっぷりある知性」を育てるという事が、大事です。それこそそういう場を、「そこにいたらそういう肺活量のある知性が育つような場」をどういうふうに作った方が良いのかと考えるのが、本当の教育に関わるものの、あるいは大人達の責任ではないかというふうに...思って...おります。

丁度、一時間。どうも長い間、ご清聴ありがとうございました。